

9 E区SI 4 出土の蕨手刀について

ここではE区SI04出土の蕨手刀(5001)について、再度その特徴にふれつつ年代的な位置づけを中心に若干の検討を試みたい。

観察

本遺跡出土蕨手刀(報告書掲載番号5001:以下では河崎刀と略称する)は先端部を欠損するものの把頭、把など刀身部が比較的良好に遺存している。現存長357mm、棟幅7mm、刀身幅最大で38mm、把幅は最大で42mmである。把木をもたない共鉄造りの構造をもつ。装着される装具には懸け通し金具、鐔、縁金具があるが、それ以外の足金具などは出土しない。以下各部位ごとにその特徴を述べよう。

蕨手刀は把頭が早蕨の形状に類似することから名付けられたように、把頭の形態に特徴がある。本例の把頭は把の先端から下側(刃側)に向けてやや角度を変えて鈍角に屈曲している。刃側のラインをみるとこの屈曲部には角をもたない。把頭端は弧線状を呈するが、円形というより隅丸方形状を呈する。把頭の幅は30mm、長さは屈曲部から先端部まで29mmである。把頭中央部には懸け通し孔が穿たれており、鉄製座金具が両側から装着される。この金具は直径28mm、高さ6mmであり、中央に懸け通し孔である8mmの孔が穿たれる。表面に菊弁状の溝の有無は鎌に覆われているため不明である。

把(把間)は鎌に覆われているものの、ほぼ全容が遺存する。鐔元から把頭端の屈曲までの長さ83mm、幅は最大で42mm、最小で24mmであり、厚さは7mmである。

いわゆる把反りは刀身の背側の線を基準にすると7mm上方に出ているにすぎず、あまり反りが発達しない。絞りとなる鐔元と把頭の下端との差は20mmであり、絞りの強い部類に属するであろう。把間には有機質が一部に残存しており、把巻きの痕跡かもしれない。把と刀身とは関によって区画されており、把側には鐔に接して縁金具が装着されている。

関は現状では鐔や把縁金具のため観察できないが、刀身幅と把幅の差から両関であると推定できる。鐔元での幅は刀身部の方が小さい。鐔は鉄製の喰出鐔であり、平面形は上位に最大径もつ広義の倒卵形である。長さ60mm、最大幅27mm、厚さ7mmであり、両側縁は刃側に向かって直線的にすぼまっていく。鐔は刀身の構造から鋒側から挿入されており、先述の縁金具によって固定されている。

刀身は鋒部分が欠損しており、現状では長さが235mmである。元幅は39mmと最大であり、最小は中央部で29mmである。厚さ(棟幅)は7mmである。この現存する法量から推定するとあまり刀身の長くない部類に属すると考えられる。鎬の痕跡が無く平造りである。刀身はまた、反りが無く直線的にのびていて、中央部がやや湾曲している。

装着されている装具には、先述のように懸け通し金具、縁金具、鐔の3点があるが、足金具は発見されていない。また、出土地付近には縁金具が1点出土しており、長径31mm、短径が18mmであり、一部欠損する。この大きさから蕨手刀に装着される金具ではなく、小刀のようなより小型のものに装着されると思われる。

以上のように観察すると、河崎刀の最大の特徴は、把頭の形態と欠損しているものの全長にあるといえる。

類例の紹介

本例は先端部(鋒)が欠損しているため全体の形状・法量が不明である点は先にふれた通りであるが、

その平面形態はある程度復元できる。蕨手刀はおもに把頭の形状で大別できることから、これを基準に本例と類似する例をいくつかあげてみたい。把頭の分類は八木(1996)に詳しく、ここではこの分類にしたがっておく。

本例は前項の観察のように、把頭が鈍角に屈曲することから、八木分類のF類に相当する。『蕨手刀集成(第3版)』(八木・藤村2003)によると267例中F類の把頭を有するものは32例確認できる。このうち岩手県内の出土例をあげると以下のとおりである。

No.	出土遺跡	所 在 地	全長 (mm)	刃長 (mm)	把反り(mm)	絞り (mm)
1	長根6号墳	岩手県 宮古市	506	387	5	24
2	五条丸古墳群	岩手県 北上市	—	—	8	38
3	菖蒲田古墳群	岩手県 北上市	—	—	8	27
4	五条丸20号墳	岩手県 北上市	502	380	6	27
5	長谷堂	岩手県 大船渡市	—	—	20	37
6	上平	岩手県 宮守村	470	344	6	20
7	日高西小石森塚	岩手県 水沢市	596	455	28	50
8	外川目	岩手県 軽米町	492	350	18	31
9	若柳	岩手県 胆沢町	—	—	16	43
10	摺沢八幡社	岩手県 大東町	—	—	15	31

多くはその出土状況が不明のものが多いが、いわゆる「末期古墳」からの出土が多い傾向にある。また、県外においても北海道～東北地方を中心にして少数ではあるが関東地方も加えてその出土がみられる。とくに東北地方の日本海側には分布が集中する傾向がある。また、本例のように住居跡からの出土はF類についてはあまり例がない。

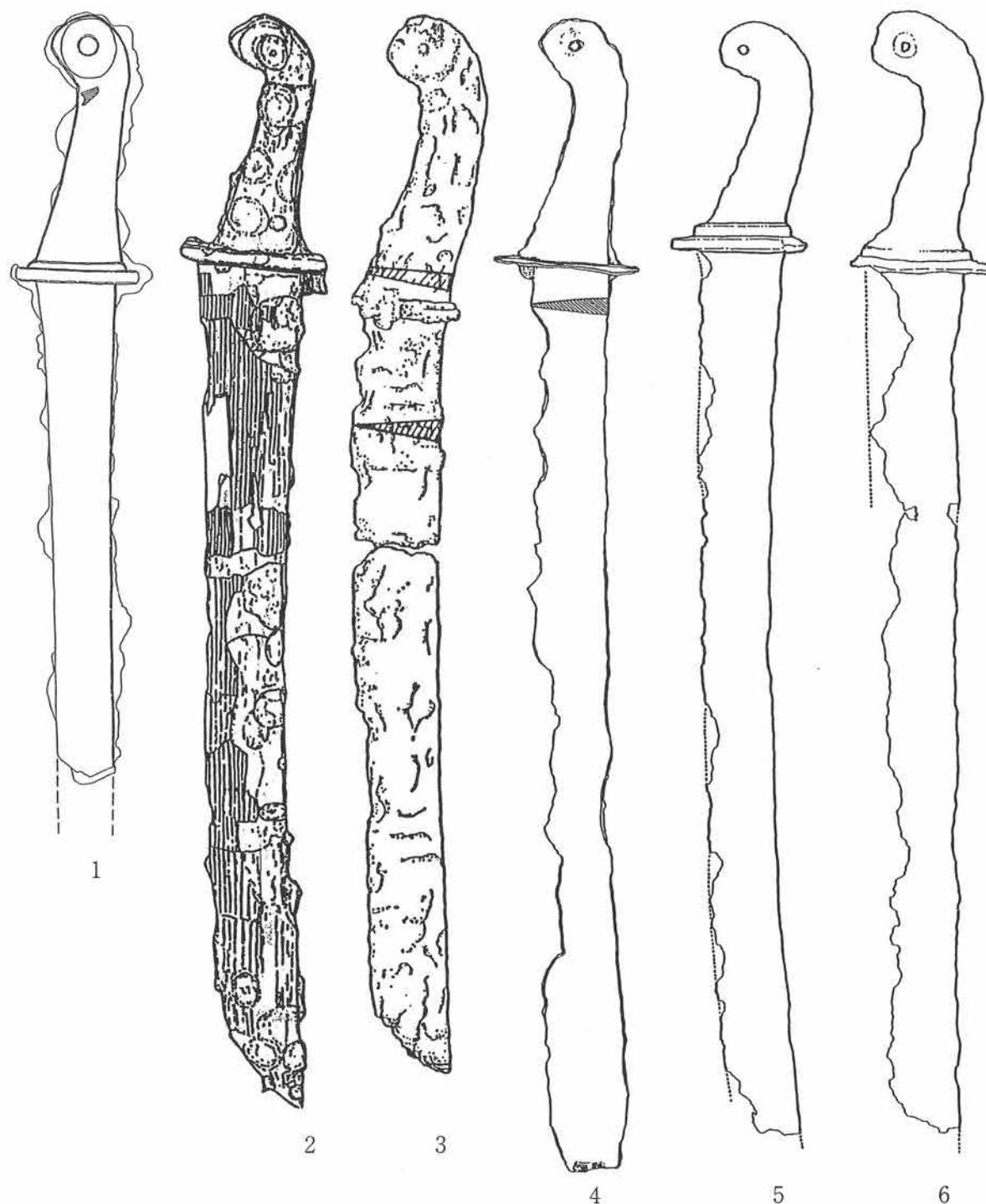
このようなF類の把頭をもつ蕨手刀の特徴をみると、まず装具については足金具が装着される、あるいは遺存する例はほとんど確認できない。その他の装具については懸け通し金具と縁金具・鐔のみであり、このうち縁金具は省略される場合がある。実測図で判断する限りにおいて鞘も明確に伴うものも少ない。共通して装着される装具は鐔のみとなる。

把頭の形態はF類に大別できるものの、細部形態をみると違いも見いだせる。本例(河崎刀)のようにわずかに屈曲するものから、五条丸古墳群や摺沢八幡社出土刀のようにゆるやかに屈曲するものの把頭の長いものも存在する。これらは別に分類されるかもしれないが、例数が少ないので現状では判断できない。把反りの数値では、大きく反るものやあまり反らないものの2者に分けられそうである。これらは黒済のいう2つの系列にそれぞれ対応するものと考えられる(黒済2004)。本例はこのうち把反りの発達しない系列に属するであろう。

関部の構造は、本例のように把が刀身より幅が広くなるものはあまり確認できないが、実物をすべて観察できていないため明確に判断することができない。関部の構造については2者がある可能性を指摘しておく。

把の長さについては、山形県小田島野田刀、岩手県摺沢八幡社刀、岩手県長沼6号墳刀などのように110mm前後になるものがある一方で、北海道常呂刀、北海道坊主山刀などのように160mmを超える長さのものがあるが、把の長短の区別は明確にしがたい。

全長あるいは刃長には数値的にいくつかのまとまりがみつけられる。把頭F類のうちでは大きく3つのまとまりがある。全長500mm前後あるいはそれ以下のものと600mm以下のもの、600mm以上のもの



1.河崎の柵擬定地出土(川崎村)
2.長根6号墳出土(宮古市)
3.外川目出土(軽米町)
4.葛蒲田古墳群出土(北上市)
5.摺沢八幡社所蔵(大東町)
6.五条丸古墳群出土(北上市)

第213図 岩手県内出土蕨手刀の諸例

の3者である。この全長の特徴についてはあとでふれる。

このように各種の特徴をみると、多くは共通点する内容を持ちながらも相違点が少なからず確認できる。同じ型式の把頭をもつ蕨手刀においても相違する属性が存在するということである。

また、この同一型式という点から年代的にはほぼ同時期に位置づけられることが予想される。次にこの点について考えてみよう。

年代的位置づけ

蕨手刀の編年は古くより研究が重ねられており、とくに八木による研究によりそのおおよその方向性は明らかになりつつある（八木1996など）。これらの成果に導かれながら、本例の年代的な位置づけを行う。

八木論ではおもに足金具と把反り、絞りの数値を基準にして、その前後関係を求めている。F類の把頭をもつ蕨手刀については、おおよそ8世紀前葉から9世紀にかけての年代が考えられている。F類のなかでも絞りや把反りの数値が低いものが古く、数値が大きくなるものが新しいとされる。河崎刀は八木の基準に照らすと把反りが12mm以下で、絞りが31mm以上であることから把頭2に内包される。この「把頭2」の年代はやや幅が認められるが8世紀中葉～後葉に位置づけられている。

また、八木論では把頭D・E・F類をもつ蕨手刀は、絞りや把反りの数値が漸次大きくなることを基本とし、数値が大きいものを新しい時期のものと判断している。しかし、黒済の指摘のように把反りが顕著な一群と絞りの顕著な一群に2大別できるなら、単純に数値が大きいものが新しい時期のものとは断定できないであろう。また、絶対年代については装着される足金具の年代観を援用していることもあり、足金具が装着される例の少ないF類の把頭をもつ蕨手刀の年代を決定するには困難が伴っている。

このように明確に遺構にともなって出土する例の少ない蕨手刀の年代は、現段階では問題点も残るもの、F類の把頭をもつものは8世紀前葉を上限として、8世紀後葉を下限と想定できることになる。

今回の出土状況を積極的に評価するならば、明確に8世紀後葉の土器を伴って蕨手刀が出土したことになる。河崎刀のようなF類の把頭をもつ蕨手刀は、共伴する土器の年代からみても、下限の時期である8世紀後葉という年代に限定できるのである。

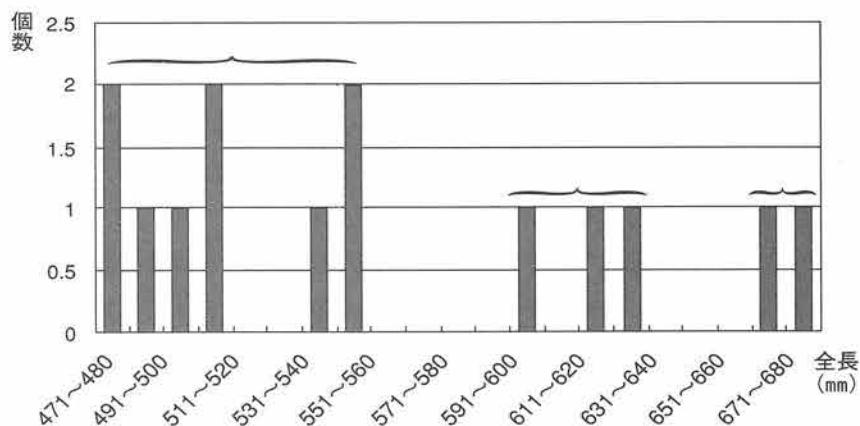
このほか、さらなる問題としては、長さ（全長もしくは刃長）の問題がある。従来、蕨手刀は時期が新しくなるにつれ長寸化していくことが想定されてきた。にもかかわらず本例は鋒が欠損しているものの、どちらかといえば短寸の部類に属すると予想される。このように比較的後出な把頭型式であるF類において、短寸刀も存在すれば、秋田県脇坂飯町出土刀のように全長が665mmを超えるような長寸刀も存在するのである。把反り・絞りの数値の大小が長寸と短寸に対応する可能性もあるが、先にふれたように把反りと絞りは別系列に分けられる可能性もあるため、この点はひとまず置くことにする。

長さの検討

前項で指摘したように、本来短寸であった蕨手刀が時期を降るにつれ長寸化していくことがこれまでの研究で指摘されている。型式別の平均値を取り出してみると確かに長寸化の傾向は見いだせる。しかし、同一型式においては短寸のものから長寸のものまでその長さが多様であり、1つの型式としてはまとまりがないようにも見受けられる。ここでは、河崎刀と同様の把頭型式であるF類のみの蕨

手刀の全長について若干の検討を加える。

まずF類の把頭をもつ全長の平均をみると562mmとなる。最小が480mm、最大が680mmであり、その差が200mmにもなる。10mm程度は誤差の範囲として仮に捉えて、どの数値にまとまりがあるかを検討したのが、次のグラフである。



例数が少ないため、今後数値は多少変わる可能性があり、またF類に限定した結果であるため他の型式を含めればさらに数値やまとまりが増える可能性はある。

グラフをみると560mm以下と600mm前後以上、670mm前後以上の3つの範囲に全長が集中するという傾向が認められる。

したがって、F類の把頭をもつ蕨手刀には3つの異なる長さのものが存在することになる。

これらが絞りや把反りの数値の違いによっては年代の前後関係を示している可能性があるものの、ここでは把頭が同一型式である点を強調し、同時期に存在していたと考えたい。

従来蕨手刀は八木論のように徐々に長寸化の傾向にあるとされてきた。相対的、平均値的にみるとこの考えは首肯できるものの、細部をみると必ずしもそういう傾向は認められない。つまり、徐々に長くなるということではなく、短寸の型式が減少し、長い刀身(長寸)の型式が増加する傾向にあるということである。

蕨手刀は刃部が存在する以上、実用的であれ儀礼的であれ武器である刀としての性格を最上位にもつ。そして、その性格上長さが最も重要な属性となる。古代においては長さによって刀の呼称や階級差も見いだされることになるから、「長さ」という点が重要属性となってくるのである。したがって、この問題はさらに検討していく必要があるが、ここでは、「長さ」の重要性を指摘するにとどめ、稿をあらためて述べたい。

以上のように、前後関係がある可能性を含みつつ、同一把頭型式には3種類の全長の蕨手刀が含まれることを指摘した。その点は、黒済のいう把形態違いの指摘と同様に蕨手刀は決して単純的な変化をたどるのではなく、いくつかの系列に分かれて変化していったと考えられる。

これらの検討を通してみると、蕨手刀の編年に際しては、型式の変化が一定している把頭の有効性が指摘できる。

まとめ

以上、年代的位置づけを中心に若干の検討を行った。その結果、河崎刀は短寸であるものの、おもに把頭の型式や共伴遺物によりその時期を8世紀後葉と捉えることができた。また、本刀を検討する

にあたっては様々な問題点を指摘するにいたり、とくに長さ(全長)は重要な属性の一つなる可能性を指摘できた。

蕨手刀における編年作業はこれまでに全体的な傾向は見いだされるようになっているが、まだ細分される可能性や系列に分化できる可能性も認められた。こういった点をさらに深化させることができるならば、今後蕨手刀研究のみならず出土する遺構、とくにいわゆる「末期古墳」に関連してあらたな見解が創出される可能性もうまれる。これらの点は今後あらためて再検討を行っていきたいと思う。(西澤)

<引用参考文献>

- 石井昌国 1966 『蕨手刀』雄山閣
 高橋信雄 1984 「岩手の古代鉄器に関する検討(2)」『岩手県立博物館研究報告』第2号
 八木光則 1996 「蕨手刀の変遷と性格」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念会
 八木光則・藤村茂克 2003 『蕨手刀集成(第3版)』盛岡市文化財研究会
 黒済和彦 2004 「群馬県出土蕨手刀の分類と編年」『群馬考古学手帳』第14号
 黒済和彦 2005 「群馬県出土蕨手刀の分布とその性格」『群馬考古学手帳』第15号

出典

- 1 本書
- 2 (財) 岩手埋文1990 『長根I 遺跡発掘調査報告書』より
- 3 石井(1966) より転載
- 4 和賀町教育委員会1991 『和賀町内遺跡分布調査報告書Ⅲ』より
- 5 八木・藤村(2003) より転載
- 6 八木・藤村(2003) より転載